里見八犬傳 拾三編 巻廿五

へ13

拾三編五巻之内

本五

松野 勝苔院

へ13 3416 73

南總里見八犬傳第九輯巻之二十五

東都 曲亭主人編次

第百三十八回 士卒矛盾して自家を防ぐ 餅書数に因て秘密を告ぐ

登時亦堅削も徳用が諂諛の迷るを拾ひ足ざるを補んとて膝を稽めて復六にうち向ひて目今師父の稟されし如く結城が非道乱政なる是裏には師父の庇に倚て那家再興の欽びありし恩を受て恩を思ひ惟成朝の家の長なる朝重なるが心鳥にも獣にも劣るを争何へせむ縦追放せられずとも危邦には入べからず乱邦には居るべからず寔に浮世の栄枯廉辱今に創ぬ事ならず是も菩提の種なれば深林幽谷に菴を締び紛ひ済して二たび塵に染らじと思ふのみ年来の師恩を外に俟る時夏憂を分ぞ身単の往方を定むべき身にあらねば銭ありて路遥なる逆旅艱苦の伴に達て送届けまゐらせん身の暇を賜るべし。

とのみいひて胡意歎息して。理あらぬ虚言も時に取ては紫の朱を奪ふ可なると。よくも思へば復六は听て忽地悖然る怒面に顕れて。弁は安からぬものにそあれ結城里見が謀反の椿事は只世の風聲のみにして正しき證据あるにあらねば許さるゝべけれども。氏朝季基以下の先亡その士卒に至るまで皆是嘉吉の逆徒なれば。年歴ぬるとも追薦供粮は是憚るべきものなるに何ぞや隣國の僧俗を招き聚合してその黨の施行を羞ず。反て那家の香華院なる住持を逐まく欲せしは京鎌倉の聞えを思はぬ成朝ぬしが傲慢非礼の底意も推して知るに足れり。好みその議は且く措て。徳用と甲舍法師に做果さるゝの惜くし。罪なくて那里を逐れしは是物怪の幸ひ。我眼の黒からん程洛中洛外一二の名高き大刹の住持に做て紫衣僧綱の顕職に推登されなば。甲舍院なる逆足寺に勝らずや。是に就ても感じ思ふは堅削御坊の老実なる。徳用が法眷のさぞなる結城にありけんを今その時に従ふ者なくて只是和僧のみと聞く。孝順賞するに餘りあり。山居の楽ひは然ることながら倶に這里に住りて。栄えその師と同くせば。陰徳ありて陽報あなる後の恨なるべし。然けれども事情をよくも得知る所京人の口実も絶て戸も鎖れねば権且倶に屏居て外聞を避るにあり。その義をよろしうのみ。と叮寧に慰めて在奥なる離亭を徳用と堅削が子舍と定め。弁里に居らして新しき衣の相応なるを多く貪出して分ち取せ。日毎の饗食饌好をも盡して。管待賓客に似たれども一家児なる奴婢們も徳用師弟の噂をせずと特に緊しく警言しければ。是を知る者稀なりけり。尓るにその時徳用が母は世を去りて既に年来になるものから。父復六に両個の側室あり。又徳用が弟もありける父復六の妾腹の二男にて香西再六政景と喚做るが。君命によりて宅眷を将て本貫阿波に赴きて年来京師に在ざれば。その義をいまだ知ざりけり。現人の親として其子の所行を知ざるは通ての世の習俗なれば。復六ならで只管に徳用が佯誕の片言を信容て送恨遣る方なく。隨に次の日主の政元に件の事の顛末を箇様々々と密に訴まうしつゝ隨に告しかば。政元驚きて且訝りて尓らば我徳用に對面して。それも具に听くべきに。白晝は憚りあるにあらねば日暮て相伴ひまゐりね。といはれて

復六怡悦に堪ず。宿所に退りて件の便宜を。徳用に耳語示し。當晩倶して参りしかバ。改元則徳用を閑室に召入れて先茶を賜ひ果子を賜ふ。徳に復六が密訴の趣。且結城なるありといふその事の顛末を云云と問ふに。徳用ハ父に告たる那佯詐なるに再按の趣を盡し演て。結城里見を謗りて酷しく。言果て又の手ハ他們が逆謀ハ僞かそ。いまだ證據を得ざれども天に口なし。人をもて言すなるよしの古語あれバ相違あるべくもあらず。倘一舉にて断ざれバ。斧を用るの患ひあり。鎌倉の両管領へ征伐の義を命せられなバ。御後悔なかるべし。その義甚麼と哄誘せバ政元一霎時沈吟して。和僧の意見も所以なきにあらねど。応仁以来諸國乱れて陵夷皇都に逮びしに干戈寧ろ歇く理りて。都鄙皆安堵の今に至れり。弁と只風聲耳に據るのミにて。結城里見を征伐せバ。東國是より又乱れて。民復塗炭に淪むべし。然れバ征伐の一條ハ他們が旗を建るに及びて。是を伐とも遅からず。姑且度外に措んのミ。和僧の上を我が與に乳兄弟の因もあれバ。いかで皇都の大判へ移轉の便宜を計ひて。時を待せよかしと。

慰られて徳用ハかひなしと思へども。犯して諫ん実事なけれバ。陽にハ寛仁大度と稱えて。餘談に短夜深けり。是より後も政元ハ時々悄地に徳用を召よせて。下總上總の風俗人氣の好まじき尋向ふに。徳用是を又便りを得てハ。結城里見の両君臣を讒るに酷しく且堅削が己に従ふて。その地に赴しを孝順とのミ做ていかでか只とりけさせんと只管薦め稟したれバ。その後又政元ハ堅削を召近着て。夜話の陪堂にぞなしける。抑政元が法師をもて陪堂になすハ。年来外法を修すれバ。その故に政元ハ敢女色に親まず。然バこそあれ故事より妻女をもなく子もあらねバ政務の暇ある折の樂種に做たりしとぞ。今出川亞相入道義視卿の息女服の姫上の其名を雪吹と喚れたるハ。母いと賤しかれバ。御子の内にも數まへられ玉ハで。その母の里方に竊妾なくて在しを。政元聽て養ひとりて己が女児に做し。あらゆる老若の女房我名欽冊傳て深窓の下にしも鞠養せられけるが。今茲ハ十六歳に[illegible]ひけり。然バ這姫上ハ容止の美しきを三月の花に擬べく。又肌膚の清らかなるハ仲秋の月に似たり。一たび笑ハ城を傾け。二たび笑ハ

圀を傾ると唐山人の物に寫しゝも然りと思ふばかりなれども惜むべしヨヲ病ありて常に蟲積の患ありければ臥もせず起もせぬ日も屏居てのみ在なりしが改元は是が與に甲乙と對を擇むにはあらず意に稱ふもあらざれども且ヨヲ病ある故に痊可の祈をせさせんとて有信し程に雪吹媛に給事まつる女房們は頃者徳用堅削が夜々君侯の侍宴に召れて加持法驗の灼然なるよしを問答しければ言の趣を皆知りて同ち聚合て商量しつゝ那師の坊と呼えて香西主の家子にて相公と乳兄弟なる因さへあり然しもなれば姫上の病着に加持を憑まゝ驗あらんと云女流の衆議一決したりければ卌傳の老女房件の衆議の趣を復六に告て願稟まゝに改元素より修法を好めばなる像べしとも許しけるにぞ更にて徳用は雪吹媛の持病の發る毎に堅削を領てその寝所に近づきて加持して徒夜を守るのみ驗あるべくもあらざれども呪法の暇ある折に堅削江湖の浮談して女房們の笑ひを取る唇の口と薄ければ雪吹媛さへ慰められて保養の一助なりにけむ蟲積やゝく痊りて結髪をする日もあれば女房們は感信して只是徳用堅削が法驗なりとのみ思へる改元も亦歡びて隨即件の兇僧師徒に布施をしく取せしかば信愛あさくなりける尓程に秋八月に至りて安房の里見の使者犬江親兵衛仁蟹崎十一郎照文と喚做せるが貢調の金銀と土宜を載韓櫃挟籠して水路より京都に詣く里見義成の家の勇臣八個の犬士の氏と姓を請まつると聞えしかば徳用舊惱に堪難て肚裏に思ふやう曩に我結城にて那犬士們に虜にせられて能化慶院に在りし時他們が衆議内談によりてその姓名さへ人と爲さへ側聞して具に知りぬ我身一旦生拘られる寃家は犬塚信乃おして犬江は當敵ならねども那奴は左右川の上にて長城枕之介を殺を走らして犬を拯し臘砥見られば怨み倶に等し況て今我が這里に在るを知らば死地に入らしは妙なるべき默算凡て定りしが先堅削に意衷を示してその後父子密談あり有一宵悄地に改元に件の意趣を告て亦夫も聞ば知し召れしや今番里見が使に遣て參上りたる那犬江親兵衛は猛勇宇宙に儔罕なる惡少年にて且抑里見の勇臣に犬をもて氏にせる者甲乙都て八名あり就中那親兵衛は年少

なく武術に老たる修煉至妙の手段あれバ。そもそも今茲の夏四月結城より程遠からぬ左右川の上にて。城主の忠臣長城惴利ガ二隊の士卒と闘ふて。剣人馬共侶に撞抗て川へ放下されし本事ハ拙僧見て知りぬ。然バ里見が叛逆の計較ハ則是八犬士の帮助あるによりてぞ。寧今那親兵衛を討りて罪に陥れて結果けれバ。義成ハ憶りなく隻臂を挑れし心地して。勢ひ是より撓むべし。なく討せ給ハバ御後悔のやはあらむいかでと悄めきて連りに薦めて已ざりしを。改元听て頭を掉て。和僧の意見然もあるべし。今ぞ里見の謀叛ハ他にもかく證据なし。今見る所聞所ハ忠臣にして上を敬ひ。禁裡并に将軍家及我們に奉まで貢進の礼漏る者なく。八士の姓氏を請まうすを許まゐして其使に罪を負して誅戮せバ東国の諸侯解體してなく武命に従ふべからず。是を思ひなおのなとられて徳用歎息して人の及ざる寛仁御大度然まで思召もるべし。姓氏の一義を許しおいて副使を返し遣し。親兵衛をのみ抑留置て京師の土に做しあらバ。それね里見に折損あり。虎を放ちて山へ返さむ。婦人の仁に似るべ

くありしを憚りたる。猶幾番も賢慮を旋らし給ひねと啣言がましく術て易る毒氣煽に傾れバ。改元沈吟じ。且頷きて。我も亦那犬江親兵衛が。少年にして大事の使に違られしものゆゑ。必是後傑なるべしと猜せざるにあらねど。然までに武藝勇力の千萬人に敵するとハ本事ハ信し易からず。卒然らバ将軍家の台命と唱哄て。他を我邸に拘し留め。這頭に名無る武人力士と試較せゆくその勝劣を儘して後に進退せん。然バ親兵衛が本事なくも衆敵に堪ずして。弁里に命を殞さバ。只是自業自得にて里見も怨に由るなかるべし。倘亦親兵衛が本事いへるが如く。よく衆敵を折くに足らバ。実に蓋世の豪傑なれバ。我里見に乞て高禄もて家臣にせん。孰の方にも損ハなし。枉て其議に儘せよかしと解れて。徳用尚飽ねども用ひられねバ優もやられず。あれが苦笑ひつ頷徹て賢慮感服仕りぬ。然らバその試較の敵にハ拙僧も加へ給ひね。縦昔の牟孺丸曽我五郎に十倍せりとも人に讓るべうも思ひ侍らずと誇れバ。改元笑領きて。弁いその折の時宜によらむ。秘よ秘よと口を鉗めて當晩の密議果にければ。改元計りて親兵衛を安房へ還さず。他が宿所を從者に遷びてその伴

當を遠離して、伴當にも亦勇卒智者ありて、這方の機密を洩さバ、主を資助て脱去るべし。と
のみ念ひしと怙まで、伎のごとくに討ん程に、門子們にも情地に下知して、親兵衛が伴當の市店に在る
代四郎等が、主の安否を問んとて来ぬるを、緊しく制めさせて、決して内へ入れざりしは、是等の密意あ
れバ也。這時侯又徳用は、獨情地に思ふやう、我は主君に政元どのに薦め票して、那犬江親兵衛奴を夙く
結果んと欲あるに、主君聡に遠慮ありて、その事思ふ如くならず。然れども試撃の計は是切ての首尾
して那奴が命を斷ん者は、人とも世とも我を裏に在る怨を復えんと時とみぞ。且その父復六に告し、猛
可に京師の鐵匠に鐵の鹿杖の重六十斤なるを、火急に作らせて、准備亟に整ふ程に、亦復思ひ
旋らせバ、京家の武士に武藝勇悍、親兵衛が敵するに足る者五六名のみ。易からで、是に加らバ我あ
らバ萬に一も失あらじと思ふものから、氣味好らず。且裏に左右川が、那奴が捧ゑ遠目に相てぞ目覚
かりしに、況能化院の二門に隻手を掛て、如輙く推倒さえとありける勁力、給と云、恰と云、侮りがたき大敵也。
勝負は時の氣運に在る。倘試撃の折、御内の諸勇士もさへ不測の失あらバ、主君必親兵衛を

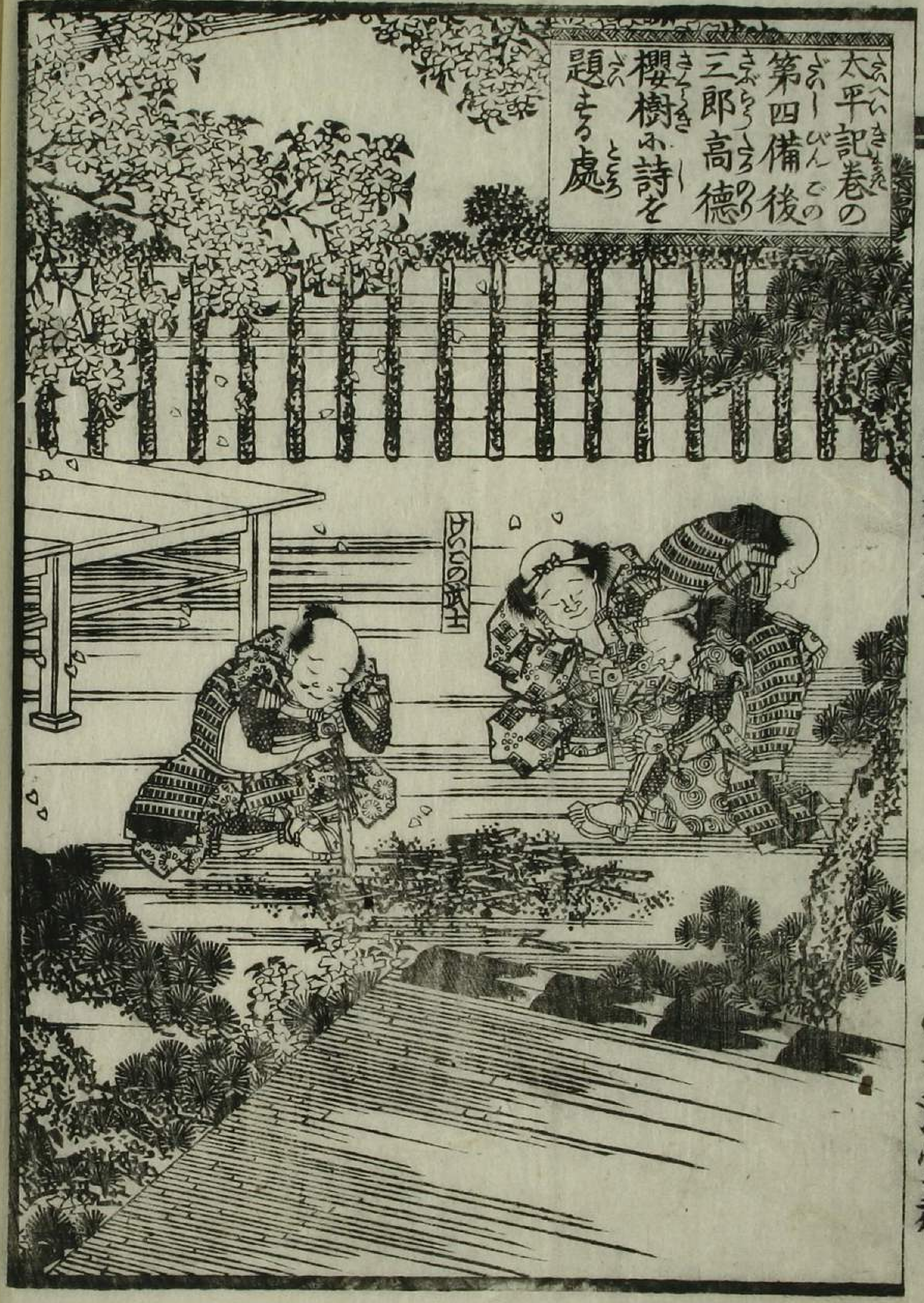
惜みて愈放さで、高禄をもて家臣にせられん。倘その田地に造り出す部語にいふ賊に糧を齎すも一期の
不覚。何の日にか怨を復さん。危き試撃の日を待んより、夜に紛れて那奴が宿所へ潜入り、張寄て只一
刀に結果けれバ、是第一の捷徑ぞ。後の患を除くに夙なり。嗚呼侖也と、肚裏に再四の主張決れ
ども、父復六にのミ秘して告ず。堅削にのミ意衷を示して、其次の夜更闌し時、侯堅削を伴ひて、
情地に親兵衛が宿所へ赴くに、各掩膊脛衣に身を固めて、戒刀を腰に跨へ、烏き帽巾に面を裹て、
雙眼のミ脊に顕し、布の締附たる戦鞋を穿做たる准備に毫も透ありて、既にして親兵衛が
宿所に近づく塀を踰り、庭門より潜び入りて壁を穿ち、隙を鑽り辛くして内に入りて、他が臥
房は那里ならんと思へば、左右して找難て、坐席の障子に舌をもて濡して、細小なる穴數を穿て奥の
かたを窺覰るに、豈憶んや親兵衛が臥房とおぼしき隔亮の這方なる究竟の士卒十五六名、皆器
械を側に引着て、端然として夜を衛ぞ在りける。義徳用堅削が、いまだ知らざる所ある政元は
聟しく倘親兵衛が機密を悟りて脱れ去る宵のあらんとて、情地に究竟の精兵十五六

名を夜毎に他が宿所に遣しく他が枕に就くに及びて臥房の邊を戍る事一宵
も間断あらず天の明るまで是に及びて情地に出て色にしるぞ親兵衛も是を知るぞ況徳
用堅削る思ひかけぬ事の光景に呆れて頭を搔ながら計較虚になりけるその夜ハ只得退
きて去りしが猶我番に当て張り戍兵の隙あらばやと思ひつゝ又虚負して両夕を經て又潜り
てしに陰戍の士卒们ハかの朝親兵衛が宿所の庭の板屏に人の泥脚の跡印して壁さへ毀ちしを
見出して必是犬江が伴當に間見の術をしる者主を幇助て合まくるにて潜び来つる也
あらむぞとて倘奪すれば我們が後難孰か免るべき今宵より人を増て外面をこそ戍るべかれ
とて大家夙く商量ま果てその戍の地を易しれども親兵衛に知られんことを憚りて物の音もせ
ず咳をさへ袖に包みて悄々地に宿所の四下を囘りて時をうち更る夜行も閑あると云け
れバ徳用と堅削ハその邊へも近つくべくもあらず何ぞれバ躬方の與に係りて妨げせらるゝやらむ是も亦
世の常言に似て讐に刃を借すに似たる鈍や朽惜し使をしとうち呟くのミ術なけれバ又阿容

阿容とかくて去程に徳用が其くるにたらず今はた思へバ刺客の術ハ心に違ぬ所行にて勇者の本意に
あらざれバ權且他に命を貸て試戦の折に我一棒を喫して往生させんと今宵に限るとこそ思へバ
堅削點頭て然バ師父の勍力武藝ハ適に親兵衛の上に出て最晴れる試戦の折にそ
復しあらんぞ潜び寄て寝首を捕るより猶愉快くハあるべしと慰められて徳用ハ今さら勿論々々
と悄めるにあくて減らず口労して今宵も功なく黙き脚さへ疲らして已が宿所へ還りけり抑這義
條の顛末ハ秘密の中の極秘になりけれバ人の知るべきことあらねど何ぞれバ乎も洩れて下司の耳にも
入りけん誠なる哉古語に云ぞ隠るゝより顯れぬハなく微なるより明なるハなし柳鵁鵡を隠
すぞ聲外に聽え雪ハ鷺鷥を匿して飛ぶ時に識らる獨情地做といへども欲念已に起る
時其機必先動く現隱貫の洩易き恰るべく慎むべし間語休題然バ紀二六が大部屋に
部屋の毎の噂に因て少し知りける件の秘密の言の趣を得までハ詳に諜ずして其
崖略を得たりしかバ心情地に驚き憂ひていかで這義を大江主に告る便りも欲得と念ふ程に親

兵衛の隷僕們ハ夜も日も人の出入に憚られ書ハ忌る者なる頃者来れる餅師が軍書の諳
読妙なりと人の噂に伝知りてその餅の價ハいと廉くて然る一藝さへあるなれバ我も買ふべし皆買
ねとて来あるを招きよせて餅を買ふその勘らるゝ然而太平記を聴んとて大家請ひ已ざり
けり登時紀二六ハ這里ぞ親兵衛が抑置るゝ宿所なりと豫より知らざるにあらざれバ非如
對面の便宜となるとも切て今我来にけるを知せまゐらするに便り好と思へバ毫も辞ひずして
太平記巻の四に正慶元年の春笠置山の官軍敗れて後醍醐天皇隠岐国へ迁されさせ
ある時備後三郎高徳が行在所の櫻の幹へ詩句を寫せし一段を聲高に諳讀なし
ると大家ひとしく鳴くにその書に道らく其比正慶元年春二月 備後国に児嶋備後三郎
高徳と云者あり主上後醍醐天皇笠置に御座ありし時御方に参りて揚義兵しか事未
成先に笠置も被落されと聞えしかバ力を失て黙止けるが主上隠岐国へ被遷させ給と聞て
無貳一族共を集めて評定しけるハ志士仁人無求生以害仁有殺身

以為仁とあり。いざや臨幸の路次に参り會て奪取奉りて大軍を起し縦戸を戦場に
曝すとも名を子孫に傳んと申ければ心ある一族共皆此義に同しける。路次の難所に相
待て其隙を可伺とて備前と播磨との境なる舟坂山の巓に隠れ臥今やくと待ち
ける臨幸餘りに遅かりければ人を走らかして是を見するに警固の武士山陽道を不經播
磨の今宿より山陰道へかゝり遷幸成奉りける間高徳が支度相違してけり。ゆくりなく
美作の杉坂こそ究竟の深山なれ此にて待まゐらせんとて三石山より直違に道もなき山の
雲を凌ぎて杉阪へ着たりければ主上ハはや院の荘へ入せ給ぬと申ける間無力此より散々に
なりけるが せめても此所存を上聞に達せばやと思ける間微服潜行して時分を伺けれども可
然隙も無りければ君の御坐ある御宿の庭に大なる櫻木有けるを押削て 天莫空勾
践 時非無范蠡 御警固の武士共朝に是を見付て何事を何なる者が書
たるやらんとて讀ゐて則上聞に達しけり。主上ハ軈て詩の心を御覚り有て龍顔殊に


太平記巻の第四備後三郎高徳櫻樹に詩を題する處
けいごの武士

天莫
たかのり

御快く笑せ給ける。以上太平記と一字も差ず謬ず流るゝ水の委る如く聲高やかに誦しければ。大家堪ずややと喝采て一霎時徒然を慰めけり。有恁けれども親兵衛は静然として奥に在り障子戸隔て餅師が讀む太平記をうち聽て又の經紀兒は紀二六ならむ。と夙くも聲を猜しはて他が心を推量るに我今這里に抑留られて楚囚に異ならぬを懸向は最も惶ながら昔後醍醐天皇の隠岐の離宮に屛居られてをはしましける御悒苦に思ひ比べしと知せんとて高徳が櫻に寫まし詩句の一段を讀るなめり。亦らば那身と高徳の孤忠にみづから擬へし歟それかあらぬかと悄と身を起して偷見るに果してその人なりけり。讀果し折一個の若黨が這宿所に隷られたるを召よせて却説今来て在るは餅師歟思ふに似ず記臆の好さよ我も亦憶ふなり。童部とて戸隔ながら聽く。倶に徒然を慰めたる然る經紀兒の餅なるべし。それ將後の話柄に喫べ試まく思ふ却味ひは甚麼ぞやと問へば隷若黨微笑て然ンば餅は則飾餡にて味は凡庸なれども。價極めて廉ければ。鄙語にいふ得要東西の上やいふべきといひて呵々とうち笑へば親兵衛も亦

うち笑て。亦らば我は好なり。最上の餡を内に籠たる形は圓くも長くもあれ。只天狗餅を五六買まく欲し。然とも其の餡或は織く或は又凡庸也。深く心を用ひざれば我口に稱ひがたき。其の義とおもなるなり。よく做せる是は明日もて来よと誂てよ。ヨキくは要なし。五枚でよし。と只管に隷若黨あてなるで退出て軈て紀二六に親兵衛が誂と箇様々々と吩咐て奥に在る客人を安房の里見の正使也。犬江と喚做せる後生が作が記臆妙なれば東へ還て話柄にせんとて買る餅ぞ明日は必持て来よかし。と諭せを待ず紀二六は既に親兵衛が隷若黨に吩咐る折聲洩れてきくきくなるも。只阿唯々々と応へて賣竭したる販槌を搭駝て還る通途左まま右なる思惟なる今見大江毛誂の餅は必所以あるべし。と心つきてもその所以を早に悟るに才足ぬ那陸涙碑におもねども考べく幾町歟ゆくとも覚ず五條なる客店近くなりし時やうやう歩く思ひ得てければ心悄地に歡勇みそぞ儘倒の同丸へ走り見て恁々と件の餅を誂へて翌を契りて歇店に還りて湯に浴り夕飯を喫果ぬる同歇なる客經紀们に多く枕に就ければ單紀二六は

孤燈の下に黒手の筆を抜出して最細小なる紙に徳用堅削が密翻読言の事の趣且改元が将軍家の台命と伴りて親兵衛を返さずける奸詐邪謀の顛末と近日京家の勇士們と試勢するべしとの風聲まで漏さず細書する者五枚可开と猶小く畳分て准備既に整ひしかバ燈火弗と吹滅して軀て枕に就しが明日の便宜を思ふの故にその通宵寐も睡られず次の朝ハ毎より夙く例の販子賣買なる餡餅の阿兄許赴きて昨詆へ次巨餅と毎に鬻く餡餅をヨキく買合せ販櫃に藏ていそしく這里を立去て人多き地方に赴きて自刹の為に貯る刹刀をもて巨餅を都て兩箇に裁劊て内なる餡と合せ棄て准備の細書を一箇々々に籠て斫口を合するに檮搗へて程も見尚煖なる餅なれバ斫口愈て迹見えず噫我ながらよくしたりと思へバ獨ら笑れて又販櫃に藏め復搭駝て政元の邸へ来親兵衛が宿所に赴く程に秋の日なれバ短くて巳牌までなりにける登時紀二六ハ背門より高く呼内さく隷僕們に報る要昨日東の御客様の仰付させ給ひたる餅を持参仕りぬるを

隊より知食けん近曽の新製なりて米饅頭と喚做なるを殊に大なる仕り給へ餡ハ仰に従ひて。実に心を用ひられバ薄皮なりて其味妙なり。いかで餘人に取らしめんや。みづから竣しあへる骨折甲斐もあれかしと宣ひしかバ隷若黨在て卒然として其餅を是ぞへくと果子楪をとりて拭ふ濡布巾埃目残る漆盆に載て遞与せバ紀二六ハ菓箸をもて米饅頭を楪子に装る者才に五枚その傍に凡庸なる餡餅を装添て是を隷若黨に示していふやう這餡餅ハ麁物なれど御用の外にいへども喫べ比べ給ひなバ米饅頭の意味深きを安定に知せ給ふなる要を進らせてあげたしといふに隷若黨點頭て件の漆盆を抗てぞ盡奥へ入しゆく程に親兵衛ハ庖湢の次の間なる縁頬に站て庭を長視て在りしかバ今紀二六がいひつるの夙く具に洩聞えて既にあるをしりしかば隷若黨が告るを竢ずまで来ぬるをさてへり座よりて餅師が口状ハ這里へも詳にきこえたりいでくとありても常居る坐席に返り坐して先餅を見て含笑て現大にくも為れるなる手の侍衆 隷若黨 我思ふよしあれバ今日

那經紀児がもて来たる餅を餘さず買合て各にまゐらせんの料を計ひねといふに隷若黨歡び兼て退き出て甲乙に告て餅を買合する程に親兵衛惜地に措きて米饅頭を推試るに果して内に堅ければ東西有りけりと猜しる肚裏に思ふやう昨日紀二六が在へ来て太平記を諳讀ける備後三郎高徳が桜に寫せし詩の一段ぞ必是惜地に我に告まく欲するとあるを知せんとての所為なるんと猜しつけれバ我も亦昔唐山にも大なる鯉魚を解くその腹より一書を獲たりし故事を思ひ出てそれとなすに餅の内に密書を籠る計策を誨えて他より悟りて我ある所を得る怜悧しかりけりと感じて心に挙言る程に隷若黨が遽しく又来て親兵衛に報るやう方僅仰られしごとく餡餅を比白買合て其價を問ひしに米饅頭の價と共に五百文にはべり余分して貳分へとらせたりおのれにヨヲくはいぞやとのを親兵衛守へ否とよ我憶ふも這里に止宿を移されて各の危會に做ると既に久しけれバその徒然を慰する為なれバ否と思ふぞ乃に進らするなる東西なれバ決して戟

なるべし宜く分ちて茶消にせよ我も午後のおやつにせんといひつゝ件の米饅頭に秋児を召て後方なる袋戸開て藏措き却客硯の下布なる小紙裏を舍出し封ある儘に推試て好々行裹を開るにも這金ならば貳分あれバ隨即餅の價に足れりといひつゝ筆を拈合て餅の價金貳分と寫着て若黨に卒とて遞與して又いふやう憑ひで何とかいはん数言に似たれどども各軍記を听んとて日毎に錢を費して餅を買ふは要るものの知りる如く將軍家の台命により柳置るゝ我宿所まで遊戯に康き娯樂は憚りあるべし而して各の上までも我が謹慎の所以なれども然バとて餅をあがひ那經紀児を近づけそと賢達てものあらバ折々我も又餅の欲しき日もあらむ両三日を隔て来よと吩咐の趣を憑むぞといふに隷若黨感服して御教諭兼られし現當當們上に出る両個の小吏をらふが胸狭くて然しもおもはるゝまでも罵撒言ぬれど其頭に小心仕らむと応て躬く退きて却紀二六に件のよしを傳示して餅の價を遷せバ紀二六受合てうち戴きて販櫃へ緊と藏く答るやう御諭しの言の趣おぞろかなくそれ

されバ今より隔日に又そ参りはべらんに。御用とくと諄返して販櫃を背にせつゝ駝做く。御庇に因て。御一所もて賣買多く做果されバ退りて休足仕らむ。吁忝なのよしと。宜く禀しおはりて腰を屈めつゝ人々に告別しつゝ出て去くと大家ひとしく見かへりてその賣買に脱落なくて光実るを誉にけり。介程に紀二六ハその日歇店にかへり来て親兵衛が取せたる金子の裹を開て見んと思ふ心のいそがれて販櫃の蓋撥合て見れバ餅の湯氣籠りて内湿たる櫃なれバ裹し金子の紙濡れたり。卉を破らじとて。臂近なる火盤の埋火撥起して。裹紙をそが儘に火に翳しつゝうち返して炙るまゝに乾たる裹紙を鮮に開けバ。その金貳分より二ツ。方角両個で思ふ包みて一両あり。加之その紙に寫たし数行の文字あり。炙画の像く顕れけり何ゆゑならんと訝りながら押伸してよく見れバ直塚に示たる事。毎が諳讀の太平記高徳が詩句の意。我に告まく思ふよしある所以あらんと猜たしらバ我亦鯉書の故事に擬へて餅書の秘策を教えしを悟らバ必做あるべし。今わとて屢せバ意見にも馬

脚を露して人に知らるゝ禍あらむ。小事ハ我に告ずもあれ大事ハ餅書の密策も猶又一度ハ死もべし。且婉雲に告まくもとも他が歇店へ来ねくべからぎ。毎が主に従ハぐ。その地に在るを彩兵伴當が疑ひ問て謊々と告ざることあるべし。夫計ハ密なるを善とも躬方とらふとも少知る人の多けれバ洩易し。慎之々々古歌に云ずや。あふみなる阿漕の嶋にひく鯛の。たびかさならバ人も知りなんとあり。紀二六屢讀復して且欽び且感まる心の敬服大かたならぬ先その金子を含て蔵め又その書を推摺めて火盤に投煙に做して。又兆て思ふやう大江ぬし神なればハ今に創ぬ事ながら。昨ハ餅書の計策をそれとなく我に論えて秘密を告る便宜となさし死今ハ亦酒をもて。意見を寫して警る現素紙に酒をもて画まれ文字まれ寫ときハ尚素紙にて見えねどもその卉を火に翳し炙るに逮びて寫る限り顕るゝなる世の人の知るものから。新奇とするに足らねども時に取てハ遠慮精妙。生年九歳の童にして。よくこの田地に至らんや。実に資る神在さずハ誰か企及

ぶべし。今こそ倭ハ心もはけ。我ハ這酒書あるとしも兎毛ばかりも悟らず知らず。只這紙の濡たるを見るに及びて憶ざも文字顕れしハ。自然の感応是も亦護らせ給ふ神の冥助欲人力人智の及ぬまでに奇之妙之。是に就ても犬江主の餅書と酒書と互にある餅酒の照對新奇にて。人意の表に出るといはまし。矧亦餅の價とまでハ。くはしく知るよし。爾時先金壹両裏措てその身寡貳分と定て。又貳分と寫まで壹両金とせず。儘に遮莫されし。臨機応変智慧廣天世に八犬士と稱られて。八朶和漢に抜萃なるハ以あるかなと一唱三歎いよく憑しく思ひけり。

第百二十九回　五條の頭に代四郎宿憂を啓く　撃剣の場に親兵衛武藝を見る

去の日紀二六が賣買果て。五條の歇店へ還りしハ。毎より些と早くて。尚未牌時候なりけり。まべ同歇店なる客經紀們も生活に出て四下に人なし。紀二六も是も亦折からの便宜と為されば。架なる木枕を下して臥つ。思ひ旋らすに犬江主に仇敵たる兇僧那徳用們が詭詐奸計の

顛末を既に主に告られたれバ。さこそ小心せらるべし。然るをも姥雪主ハ有恁る椿事を知るよしなけれバ。那上にとのミいふべくと思難て。存られずらむ。然ばとて那人達の歇店へとてハ告がたくて。三條五條ハ程遠からねど。同じ河原に在りながら。我這歇店を知らざれバ。便りなくて。そ薄情けれと思ふのミぞ術なけれバ。次の日も亦夙く。政元の邸に赴きて。大部屋小部屋の毎に餅を賣れども。軍書を講ぜず。強て求る者あれバ。事に假托け免れて只江湖上の雜譚に聊笑ひを取れるのミ。親兵衛の宿所へハ。三日に一たび赴きて。隷僕們に餅を薦めて。賣る日も買れぬ日もありけり。紀二六が恁猛に。賣買の趣を易し事情ハ。御家親兵衛が警言を思ふに得だるハ。所果なる告べきを告るに。故の儘にて慎まざれハ。餅師に相応しからぬ軍書の諳讀ありとぞ。噂いよく高からんを。智ある者ハ疑ふて。後の障りになりもやせんと阽む遠慮あれバなり。是よりして又三四日經て。紀二六は例の如く。餅を賣竣して歸るさに。五條の橋の頭にて。料ずも代四郎が。前面より來ぬるに逢ひけり。迭にあれ什麼とむかひ。

先四下を見迴まふに這時下晡の事で路行人の稀なれバ河原に老たる柳あれバ倶に其樹蔭に立寄りて土坐を差ゑたるを祝ふ祝さるゝ。代四郎は恨なる面色にて、直塚和郎は思ふ事も似ぎ心づきたる人ありかし。曩に唱們は大江主の安否を問まく思ひて那邸へ赴きしに門子們が推禁めて木牌なければとて許さねバ、和郎を索ねて那木牌を借んと尋思あるものを、歌店を那里と知ざれバ思ひしのみにて幷も果さず。今日は音耗せらるゝ欲明日なる來て那里の動静を報らせよと欲と當不娯て、秋も九月中旬まで早し暮まし鬱悒ぞ。然てそと查し主の字ぞ餘りに胸の休らねバ、和郎の歌店を那里と今に知るよしあらぞと洛中洛外二三里より遠くはあらじ。卒然らバ索ねてんと又尋思まて漫行を為ると、今ち三日になるめれど毫も便りを得ざりしが、又徒に三條なる歌店を投てかう向く、這里で逢ひしは幸ひなる哉。和郎の歌店は那里ぞや、和子の安危を知らし欲いふぞやくと急迫しく向て已ざりしぞ。紀二六禁めて且その事とらひて四下を見かへりて、聲を低めて然バとよ。曳文の恨ミハ理りなるを思ざるにあらねども、今日まで音耗せざりしは秘密の事由あれバ也。却小可ゝ曩に犬江主の教を受し、その宵よりこの川の前面なる某甲といふ飯店に在り、餅師に打扮て那木牌をもて那邸へ出入自由を得てけり。然バ賣買の餘に太平記を諳讀ましより大部屋小部屋の每に隔なきまでになりしが、那里の秘密を探り得て犬江主に告て首をいへば箇様々々尾ハ又恁々といふ。徳用堅削が事、詭許の事、故元の心術、奸計試皷あるべしといふ風聲且親兵衛が謫る餅書の秘策酒書の事その要緊の顛末を具に告ぞ。又いふやう、小可是等の秘事を叟に告まく思ひしかども、愁に宿所を造らバ夥兵伴當に怪れん。貯方といふとも要なき每に知まるときは漏易かり。姑且自然に任せよとある犬江主の酒書の誨の理りあれバ黙止てあり。登よや深くる恨をぬひそ。小可既に犬江主の宿所に立入ることを得ぞ。隷僕們に疎からねど、主に對面を許されず。非如今から那木牌を叟に貸まゐらするとも事に益なきのミならず、反て門子們が訝りて木牌の出処を問質さバ、亦禍の端と做りて。

小可さへ那邸へ出入る便宜を失ふべし。よく思ひねバ後悔あらんと諭されて代四郎つらつら聴て
憶ず太息を吻く。原来這回の禍鬼ハ那徳用なんどが所為なり。然幸ひにして犬江主ハ今
猶恙なしといへども。他們が毒計已まずハ。嗚呼危かりも殆かるべし。作麼にして可らん
やと問へバ紀二六沈吟して事情を思惟るに徳用が譎詐毒計施さぬとおもはれども。幸
ひにして政元主ハ試数を宗として。その余ハ徳用が薦る邪計を多く取らぬと噂に聞
けバ那人の底意犬江主の人柄と。その武勇を知りて悄地に愛する故なるらん歟。さらんには
大害を加ることハあるべからず。反て安かるに似たり。と解れて代四郎點頭て。それ也思ひ合せ
るよしあり。始我們浪速津に着し折犬江主の指揮により。咱們先這地に来ぬ。世の風
聲を楞聽しに京師ハ殊に男色の例ハさらに女色に勝れり。且政元主ハ夙くより悄地に
外法を行ふ故に正室側室あることなしと豫て聞けども。弘法以降龍陽調戯ハ法師まで許
すといへバ。木犀花そのとき政元主も忌ざるべし。然らんにハ犬江腋子を抑措て頑童に

せまく欲する故に弥勒の世までも放ちなく。安房へ返す日あるべからず。疚しく難しの境を開も
亦後の障になるらんといへバ紀二六含笑て。かの意ハ料りかたけれども犬江主の神なる臨機
応変の才匿しかくれバ縦其頭の情慾ありとても免るゝこと易からん。それよりも猶危きハ
試数の沙汰あれども犬江主の本事をしらく。失あらバいかにせむ。その義も心安かるべし。寔に
今日ハ料らざる遭際の長談俗話に憶ずも日の暮れバ宿所へ伴ひまゐらせなく。餘
談を罄さまく思へどもいなぶ某我歇店ハ客経紀們の合歇なれバ側に憚りいと多かり。
倘又異日小可に逢まく欲しおもひなバ朝まれ夕まれ這橋畫処に鳴立なく我賣買に出る
毎の去向帰路を等る忽ち對面輒かるべしと諭すバ代四郎點頭て好々その義もあくろ
ゆるより。嘻和郎ハ陪臣の若黨なれど惜む才子なり。それ犬江主の見出して今番の大事に使
はるゝ。那眼力も甚なるかな。和郎倘その地に来て在らぞバ我豈那里の風聲秘密を悉
まで具に听くことあらんや。寔に珍重々々と誉れバ紀二六頭を搔く。悉りかバ今に回正しく

もなき言ながら。小可が親は常陸なる。鹿嶋の郷士なりけるに。家酷く衰へて。二親なく世を去りつ。胞弟兄もなく。憑しき親族もあらねば。獨今の東人。蟹崎照文は。我外戚の小父なれば。小可年十二の時迨に那里へ身を寄て。厄會に做りしより。手習武藝も人並その師に就しく教られ。近屬猛可に引立て若黨にして使るゝ。那洪恩に答ふべき。よしなかりしに這回の大役東人に代れとある。教諭に辭ふとなせど左右なく仕りぬ。さも秘言にいへば。人の噂をもなひそとぞ。創く諦を那身の素生に。代四郎只顧感嘆して然ばこそ筆より出処卑しき人の子にあらじとまでは思ひしかども。蟹崎主の猶子なるらむとは知らで無礼を致しつ。許しあひね。卒然ながら復こそ這里で逢ふべけれといひつゝ。躬て身を起せば。紀二六も共侶に異日を契る望月の鑑は人の信と信曇らぬ心潜ぶ宵の那壷盧の宿りしぞ五條頭の杪枯に寒けき袂を分ちつ。遂に左右へ別れけり。案下不題大江親兵衛は那日紀二六に教諭しる餅書の計策成りしかば。傍に人のなき折に餅を披きて。

内なる細書と一箇に合し。懐にして皮のまゝなる。米饅頭を喫べく。その餘なるを庭扉拘児に投與へつ。餡餅そのまゝ奴隷に取らせて。當晩更闌人定りし後。單枕上なる行燈の光りもて件の細書を披き見て。徳用が讒詐政元の佯誑の事情を知りしかば。その書をも焼盡して。枕に就つ。思ふやう。管領陽に台命と唱て。咱們を抑留しは別に故あることならむと思ひしのみ。なぞ思ひきや。結城の悪僧徳用は香西復六が愛子にて政元主と乳兄弟の因ある者ならんとは。非如那奴が毒計を薦て我を揣るとも。邪は是正に勝しなければ。試藝の勝負などもて我還るべき路は開けん。又只自然に任せんのみと思慮する倒に其の夜を安く睡りけり。偖而又一句許を經て。秋も纔になりし時候。香西復六が奉書をもて。親兵衛に傳へ示す義あり。その書の略に。寡君なう遐く政務の暇を得るまゝ明日對面せんと仰らる見参已牌なるべし。とありければ。親兵衛隨即兼書を寫し使に遞與して。躬く準備を整るに。必是明日の見参は。試藝の事なるべしと思へ

ども課ぐ氣色なく。かの詰朝公服を着け両刀を腰にして徐に宿所を出る程に那掌管する両個の小吏ハ先に立て案内を致し両個の隷若黨ハ左右に従ふ且奴隷ハ鞋奴あり。柳筥を持るあり都て後方に跟てゆくめり既にして親兵衛ハ副玄関よりうち登れバ青侍案内に立て正聽に造らするに香西復六これを迎て其の日の旨を傳達す。當下青侍ハ左右より徐々と立蒐りて間ある隔亮を廣く開くを見れバ政元ハ長袴小刀にて正廳の上座に在り有司ハ左右に四維列れる幷が中に又五個の武士あり或ハ眼圓に髭髯の迹蒼く。或ハ身材高く骨逞しが或ハ飾磨紺或ハ褐色の社杯の肩陝く下短に總織の小袖の緯足らで肘の見ゆ可るを一樣に被て二尺五六寸もあるらんと見ゆる腋挿の刀を各腰に跨へて肩を尖らし臂を張り存々として有司の上坐に在り又政元の後方に侍る一個の法師あり。年歳ハ三十八九なるべし身材高く肥膏盈て面皮浅黒く。眼ハ蚺蛇に似て。鼻ハ狻猊の像く鼠色の光絹の小袖二領可襲被て。鳥紋紗の法衣の両袖を

巻抗て。身柱の上まで綁統ね。袈裟をバ胡意樹ぎして畏て扇子をうち乗く。右の傍に措ける。是則別人ならず刑餘の兇僧徳用ハ親兵衛と杏に見ゆる。眼光凄しく。勢ひ篭で和ぞろ。登時香西復六ハ親兵衛を領て栈を入り政元に向ひ額を衝く。犬江親兵衛召に因て参上たと啓え上れバ政元則親兵衛を間近く栈して詞徐に示しやう。犬江仁兼れ豫より傳達ある汝の武藝御覧の事。上にハ御ヨヌ敉カに御坐せバいまぞその日とトめかさらり。政元先試検あるべく。斯く雌雄を宣ふ上よと昨日御出されたり。是によりて今日ハも我邸中にて咱们実検すべき者ハ武藝の次第を第一に白打。第二に鬖争剣第三鎗第四に弓第五に火銃第六に棒なるべし。敵手ハ則五六名に過ぎずヨヌくハ是當家の勇士或ハ又將軍家武林虎賁の英臣と北面の武士も是あり。復六其ハ其兵毎を汲會せよと課されバ。件の武士なるらく倶に膝とぞ找めける。當下香西復六ハ親兵衛にうち向ひて犬江生是なるハ白打緝捕の名家と呼ぶし。二階松山城介ハ允可の弟

子。則この地の浮浪人當家の壮佼們が師と憑めバ月俸數口賜へまうる。無敵齋經緯是也。次ハ鞬弓術の師範として。是も亦當家に客遊する鞍馬海傳真賢是也。又その次ハ鎗法の達人將軍家の勇臣にて。澄月香車介直道是也。又その次ハ騎馬砲自得至妙の名高かるも亦當家の英士にて。種子嶋中太正告是なり。又その次ハ射術の名家昔後醍醐天皇の御時に南殿近く飛行きし。怪鳥を射て墜して名を揚る隱岐次郎左衞門尉廣有が六世孫。則當今北面の武士なる秋篠將曹廣當是なり。と一個々に汲會されバ五個の武士ありけるを。倶に找出て親兵衞に名對面をなさしけり。姑且して政元ハ猛よ親兵衞と喚びかけて。今我後方に侍る異法師ハ是東國の客僧にて。素より當家に俗縁あり。尓るに此の僧生れながらにその膂力の剛なる。又那辨慶に弥増て重六十餘斤ある鐵の鹿杖を自由に使ふ本事あり。又鞬弓劍戟挑に長るす。鈴砍の但馬和田新發智と云といへども屑ともせざる者なるとぞ。他を汝の敵

て今に加えて。其本事を見まく欲すといふて傷をみらへ。且ハ徳用躬て找ミ出て親兵衞にうち向ひて送に默禮をなすのミ。件の武士們の上に坐下。當下政元又いふやう。親兵衞並に敵手に立べき兵毎も皆聽ね。試鬪ハ木刀ならで。鎗ハ尖頭を抜去れども或ハ痛く窮所を鬪ひまて命を隕すもあるべかりき。後是も亦知るべからず。然る不覺ありとても只是自業自得。送に送恨なしと云拉言書をまゐらすべし。但し真劍をもてせんと請ふ旨あらバこれあるを开ハ又時宜に依んのミ輒く許しがたけれども神文の載する皆この旨をなるよかしと宣示す詞と共に有司件の拉言文をもて出て。聲爽やかに讀聽されバ親兵衞並に敵手の武士們と徳用も言葉して各その名字の下に花押を書寫し。指を破り血を濺ぎしと有司則合る揚て。そが儘主君に呈閲す。政元倩これを見て有信れバ且別席に退去て各々準備をせよ。亭午の時候より我も亦出て勝負を実検せん。什麼親兵衞能做きやと問れて親兵衞然しの弱冠未熟の身にしあるを愁にあん見出しに預りまうりて

免る路なし。左ても右ても勇士達に及ぶべくもあらねども、然ばとて武士たる者が敵をも怕れて今更に云云と辞ひなば、即坐に頭髪を剪り棄て、高野に入るより外に術なしとて笑ひに備んのみと答へて、徳用を尻目にかけつゝ真勇の魂氣色に見れしを、政元然ぞと苦笑して、卒然かば准備といそがね。又後にてぞとばかりに身を起して奥に入るを、徳用一霎時目送りて無敵斎に向ひてのたまふやう、洒家法師に相応しからぬ武勇の聞えあるをもて各位に加えられしを傷痛く思はれん。しかれども三四百年来、叡山の衆徒奈良法師に武勇の誉あるも尠からず。猫児も釋氏も推並て皆是国家の民なれば、義に仗て弥陀の利剣振ざることやあらむ。非如真剣ならずとも、我一棒を喫ん者、孰か往生せざるべき。然ば死しても怨なきよしを神文に載せたる、館の賢慮脱落なし。実に敬服々々と誇るを、復は推禁めて、要なき宏言せずもあれ。卒犬江生、諸勇士達且別席に退きて、儲の饍を賜りて准備をなすといそがせば、青侍們もてなしつゝ親兵衛と徳用を分ちて両室に案内しつ。その余敵

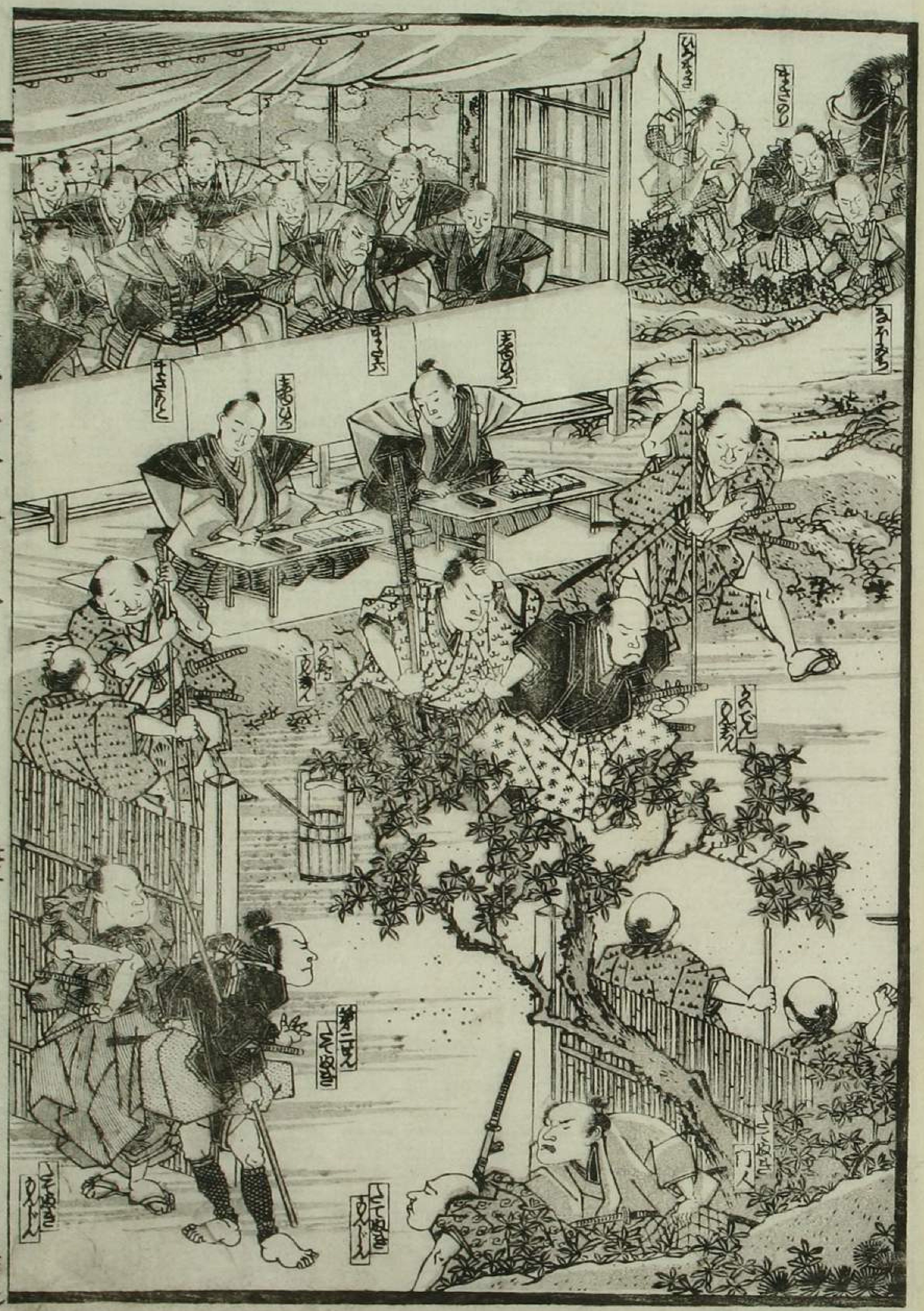
て武士は一席なく皆共侶に案内に就て、その席まで赴ける。尓間に時移りて響く正午の土圭と共に、試數をと促す大鼓音鼕々と聞えけり。登時犬江親兵衛は身甲に胲甲脛楯なく、袴を高く結て、伏姫神授の短刀を腰に帯び、小月形の名刀を右手に引提て、青侍們に案内をせられ、徐に庭より外に出て、儲の場に赴く程に、那五個の敵もの武士無敵斎經緯、鞍馬海傳真賢、澄月香車介直道、種子嶋中太正告、秋篠将曹廣當は、各一二の弟子に木刀・槍・棒・弓・箭・鳥銃・銃丸・燄硝を持せつゝ出て、試數の場に聚へり。その中に徳用は南蛮鉄の鎖衫の上に白綾の小袖を被て、鳥紋紗の腰衣を高く褰げて、辮紐もて結び紈ね、聖柄の戒刀を腰に跨て、銀の鋲打たる細鎖の銲、十王頭の鋥纏に身を固め、鼠色なる光絹の千葉巾に金の左纏の髑纏あるを眼窅に戴き、鞘染の縐紗の二幅糾合したる襷を掛たるのみ。那新制衣の鐵の鹿杖は六十斤なるを腋挾て、足には白苧の戦鞋の重底なるを穿做て、随従の徒弟陸釋坊堅削に

発見を執して乃慾張出せる面魂哥めく。一人當千の威風あり。その他五個の武士毎も或ハ鎖袗或ハ身甲。衣の下ゆへ透間もなく武具せざる者もなく。小袖袴に綺羅を盡して。鮮紉の裃一様にその日を晴と打扮ッあなら。徳用が華麗ゆへ四下を拂ふ勢ひ示及ぶべくも見えざりけり。然ハその処ハ素是走馬場頭にして五十間に八間の平坦ハ左右に結縷草生の小塘堤あり。并を二十間に五間の際。袖搨可の四目ハ離笆を締遶らしたる。四方に両折戸の小門あり。則這里を試數の場として。南の塘堤に高く假廐閣を構えたるその作りざま勾欄に似て。檐下に紫の天幕を張亘し。後方にハ五六雙の金屏を建続らして肱撐の欄干に猩々緋の氈毯をもなく撐えれバ四下も赫奕可也て。吉野龍田の春花秋葉を一度に長観る心地あり。這假廐閣ある堤塘の下に縁道ハ席を布ねて。執筆の有司二三名小机なる硯の墨を磨るなどして。會合の次第簿を開き見て将に雌雄を録さんとす。又此なる堤塘の這方四目ハ離笆の内に罟維紗の打刈衣外套

純子の野袴穿て鮫柄の両刀を帯たる両個の実検使発見に尻を掛て在り。その餘介添の武士五武師の門人職役ある者尠からず。警固の走卒一百名自に捍棒を衛立て埒の四方を守りてあり。又鞍措たる色々の馬數十頭各鑣奴等が牽めて來てあ亦堤塘の下に在り。今日の儲にあるべけれどもその數殊に多かるハ武備を示さん為なる歟勝者に牽出物の准備なるらんと人僉思へり。却試數の時に臨て大皷を鳴らしてこれを促し鉦をもて退く暗號とす。有司是等の箇條ハ死しても忘るなといふ掟書の神文を親兵衛と敵手の武士們と徳用に復讀示して。政元の命を傳ふ有信し程に政元ハ華美なる衣紋袴ゆゑ。小刀をのミ帯たる。大刀をバ胡意近習に執らして。既に假廐閣の中央にあり。その日扈従の老黨若黨香西復六を首めて。有司近臣二三十名都て公服の肩を比べ袖を列ねて齋整と左右二側に侍ててり。姑且して又試數を促す大皷撥を早めて打鳴せバ東の方なる小門より。試數の芯絶に入る者ハ是則別人ならず犬江親兵衛

仁る。袴の稜より結をくる。身装上ふ寫まーごく。先政元の假廃閣ふ向ひて。跪居く低頭揖譲の礼正う幸て阿容る色ろく更ふ又西ふ向ひて徐ふ敵ゑをまろ程ふ介添の武士長なる。棒木刀を携乃て。親兵衛の後ふあり。隊より第一番ハ白打槍棒と定められー。ふ鞍馬海傳真賢ハ惴雄の猛者なれバ。怺へぎけ絶内ふ找を入り。両個の実検使ふうち向ひて。大刀ハ是戦場ふて第一の器械なれバ。即これを短兵といへり。白打ハ近来の武藝ふて。巷路軍組数るに要あるのミ。在下御免を蒙りて第一番ふ找むべーと詞せらーく断り演く。答とまるぞ。親兵衛の身邊ふ造りて相距ること五六尺の程ふ在り。跪居く迭ふ黙礼む。海傳が介添ハ則允可の弟子ふて。從ふく後方ふ在り。携る赤樫の木刀の長三尺許なるを。對坐の間ふ措く程ふ親兵衛の介添も亦携さる木刀を生毛を。親兵衛急ふ推禁めて。否晩生ハ手ふ熟する這鉄扇あるにあるとて海傳が如きハ。原来酒家を敵ふふ足らず。と和主乃思ひ侮る歟。然ぞんバ酷く輸る

折器械短き故なるど分説種ふせん為鉄鳥許枝をせぐ。木刀と合わねと詰れバ親兵衛莞尓と笑く。否とよ闘戦の利ハ器械の長短ふよらかもあるぞ。或ハ敵のヨヌ寡ふ縁りその場の廣狭ふ據りて甲も乙も倶ふ要ある長きハ数ふ利あれども。刺まくまるふ不便なる豈徒長きを利とのミせんや。といひて腰なる鉄扇を抜出し。右手ふ合して這鉄扇ハ我為ふ活人殺人二剣ふ勝まり要ある。膳を前火よう卒々本事を試めくと窘られて海傳ハ性起り満面火のごとく憎き小猴子が似而非廣言思ひ知せん覚期をせよと罵る武者聲耳昔めしく。木刀を隼く撥き合て衝と身を起し。耶と聲かけて眉間を莅く丁と数ろて親兵衛閃りと身を反して鉄扇をもて丁々托地と受流し打拂ふ修煉精妙神出鬼没電光石火の眼ふ早光め。又口ハ陽焔飛禽の形と影ふ見る如く。白みも合られぞ数ろふ数られ。海傳秘術を盡せども。只是数千の鉄扇をあく。柵挟て八葉二十葉ふ那身を圍ふに異ならず。然バ這鞍馬海傳真賢ハ。手齢



第一戰親兵衛海傳を懲す

四十許。身材五尺八九寸。烏髪にして胸毛赤く。色浅黒く。眥裂けて。聲ハ銅鑼を鳴すに似たり。鞍馬八流撃剣の妙奥を得て京師に名あり。その教を受る者千をもて数ふべし。されバ天の下に敵手なしと思ひ誇れる自負大言して忌憚らず。況今親兵衛が少年にして優情なるを。敵手に足らずと侮りて敢合の次序を守らず。夙く真先に挑出て只一撃に仆さんと思ひしに似も拗れて受刀にのミ居ふあらバ。猶精神を励して。嘯き叫びて戦ひけり。間話休題。介程に犬江親兵衛ハ。海傍が山岌より蒐る修煉の木刀を物ともせず。一尺二寸の鉄扇をもて。幾番となく左応右接て。其疲労るを窺ふ程に海傍竟に神衰へ刀筋乱れて酔るが像く蹌々として走蒐るを親兵衛ハ。引外して鉄扇をもて海傍の右の拳を礙と撻ん。挨れて骨や摧けん。憶ず木刀を裏哩と隕して。怯むを透さず。丁と蹴る至妙の白打に。海傍ハ筋斗を仰さまに地响高く平張仆まで。一霎時ハ起もやらず。介添の弟子等驚きて。聯披起して肩に掛て退けり。登時親兵衛に介

添る一個の武士ハ。准備の水を沙碗に汲てこれを薦めなどするに。親兵衛ハその水をのミて。纔に口を漱ぐのミ。自若として又敵を待程に。ちち鳴る大鼓と共に。離色の西の小門より徐に找み入り来る武士ハ是則別人ならず。槍棒白打にその名聞えし。無敵斎経緯なり。当下亦年歳ハ四十に過ぬ。臂纏身甲に身を固めて。袴の弓折精悍なく。介添の弟子等二人後方に従へる事の形勢海傍に越られねども恨る色なく。先実検使に黙礼して躬く親兵衛に立向ひて跪居て莞然とうち笑て。適ハ犬江生目今の御本事敵するに足るべき我ならねども。擇に因て辞に由なし。一棒試の人りしと云を親兵衛うち听て現是棒ハ長兵なり。鉄扇をては相応しからじ。晩生も棒をもて。御敵にならんと云に。答に左右の介添們。素樫の棒の六尺なるを。両個の備に差出すを。迭に会て身を起せば無敵斎経緯ハ。そが儘此下退て。件の棒を繰て。又般若挍て。会直して輪々とうち振り。但風車の輪るが如く。現経緯も分く風ならで。よいとあやしう見えたりける。

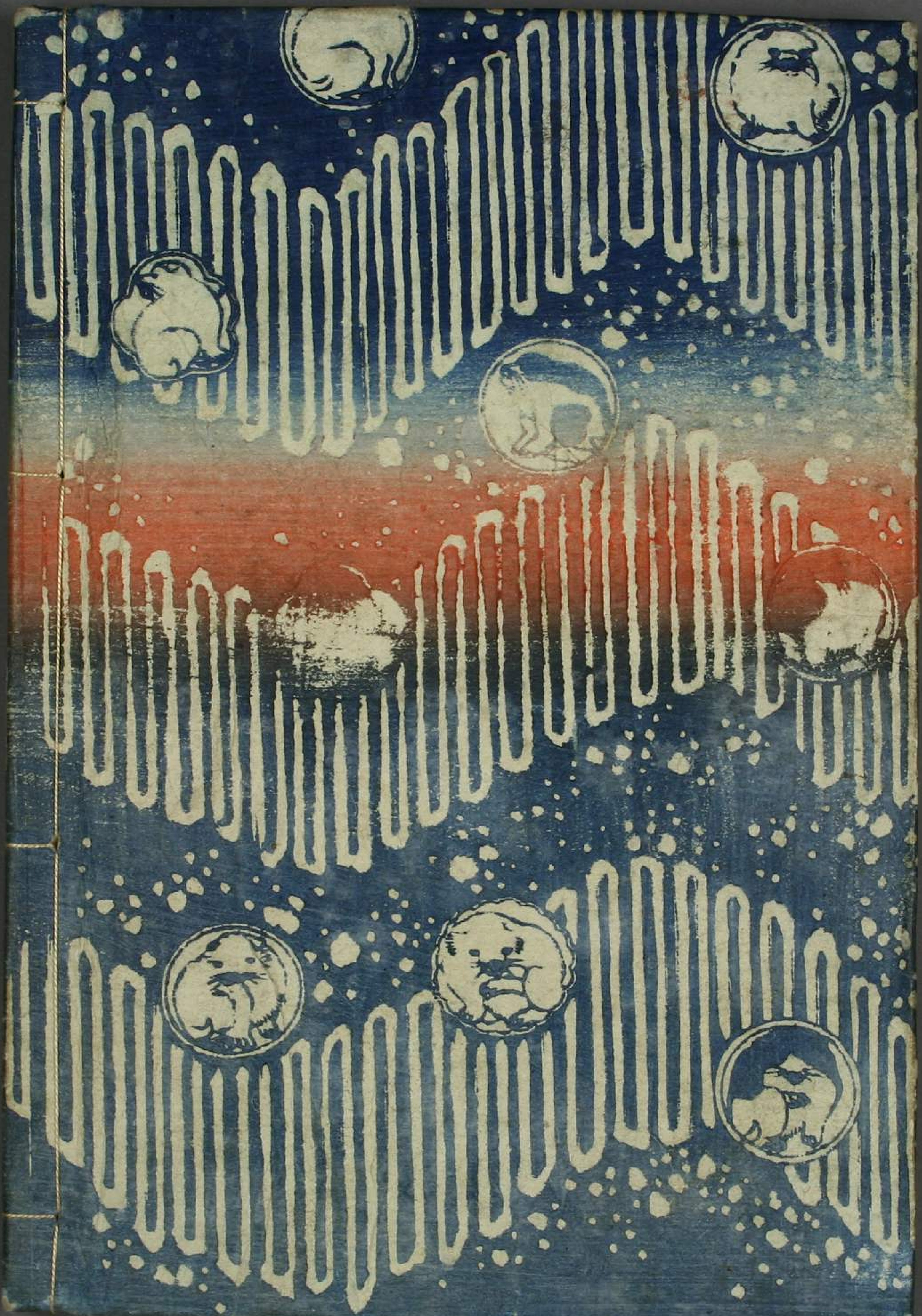
既にして無敵齋ハ更に又棒を拿直して然らバ参る犬江生とばかり佗と找向ひて身を構たる左右なく戰ハで猛可に惱る面を顰めて嗚呼とばかりに又聲かけて陸と居る犬江殿と禁めて些し退りて咱們近曽折に觸て轉筋瘰癖の持病あり目今も亦その病痾猛可に發りて筋動かなる脚癱れて堪るかね遂憾くハ思へども將息をせて異日の試ミにせん実檢使達よろしく宜く仰上られよ痛し疼しとばかりに棒を眞中と投棄て脚を曳々退けバ介添の弟子們ハ呆れて目と目を注すのミ只得棒を拾抗て倶に後ざ従ひける是よりの騎馬の争ひなれバ実檢使等ハ親兵衛を労ひて推退かして共に主君政元に親兵衛海傳が勝負分明の事及無敵齋ハ急病起りぬとて其の言趣を詳にすなハち上れバ經緯が弟子と貝屓の毎を除くの外ハ目を注し袂を掖て無敵齋が狡黠よ海傳に見懲して術よく免れん為にぞ然る急病ハ發りけめ許しもせで又推出あらし下高捷して懲さばやと耳語指さして譏り笑ふもありけり是より鎗ハ騎馬なしく。

雌雄を決ましとて豫の定りければその鎗尖を拔去りて代るに白粉を以て裏たる素絹にて囊裹の形状のごとくなるをもてせられ人ハ烏草紙の身甲埋に袖黒羅紗の戰袍を被るべく馬も騎を用ふべしとぞ既にその准備あり。則親兵衛と香車介にその件々を賜ひけり。當下澄月香車介直道ハ実檢使に就て陳ますら在下既に犬江親兵衛が本事を見て知りぬ他ハ少年と云といへども実に一人當千の遮莫倘戰場ならバ衆敵と相挑まバ首級褒ふこともあるべし係れバ今在下に相士二人を借しのならバ必や克がたし只單身でハ十二分の誉を取りがたしと洩らしけり政元これをうち聞て原来直道ハ後れを一個の幇助を乞へばこそよく鎗術に煅煉して今親兵衛の敵なるに足る者他が外ハあらず擇まぞその人なるを爭何ハせんと云詞のまだ訖らぬに政元の後に侍る近習の中に壮士あり忽地聲を振り立て我君なとて人なしとぞ英氣を貶しめ給ふぞやと呼りて突然と找出主に朝ひて恭しく額を衝くぞ。政元驚きながら熟視るにこれも亦近習の一人にて紀内鬼平五景紀と喚做る者なり。

世に云三町礫を弓張月には為朝の八町礫に作れり雑劇の諺に因るなり婦幼の耳に熟さるを以の故に今改之

其人となりや。身材低く。面は枯たる鮮蝦の如く。勇は車に逆ふ蟷螂に似たり。当下鬼平五頭を抬げて。憤然として稟まうす。臣が槍術の一藝は。その奥妙に至らねども。総角の比よりして好て投石を事とせしかば。竟にその技に自得して。杪に集る鳥。梁を走る鼠これを打に謬ず。実に是百発百中。百歩を隔て柳葉を穿ちしと聞ゆる養由基が弓箭にも優れり。本事なれば人みな並て賞感のあまりに。則臣等に綽號して今三町と喚做たり。恁命なる言のちなみに昔源為朝の勇臣と聞えたる三町礫紀平二大夫の本事に伯仲すればなり。この義を君も聞召けむ。ゆゑに澄月生の帮助の相士に臣等を仰付させ給へ。親兵衛を仆さんは。嚢裏の物を取るより易かり。と詩返しつ。連りに請ふて已ざりしを。政元聴て寔に爾なりとおもはれ投石は飛器なり。敵手を増て二人に做もまろ面正しくもなし。古又きに飛器はいかであるべき。先の上旨を親兵衛に告て答を聞けかし。と指揮に実検使等はうけたまはりて退りて躬て親兵衛に件の一議を傳示して。允きるべきや。と請問へば。親兵衛答て。然ンは単身にして両個の敵手へ望しからば。しかれども。戦場ならば争何はせん。然ども投石は難義の敵也。那保元のその名聞えし三町礫を除くの外。唐山にも二三名あり。所云曹國の武大智はその弟子孫飛と倶に投石をもて武功を見はしたり。六合内外瑣記巻の十六に見えたり。又近曾明の呉門の彭興祖の弟彭某の如きも投石に妙なるよし聞えたり。五雑組人の部を見るべし。且近曾舶来の稗史小説元人羅貫中の水滸傳に没羽箭張清あり。没羽箭は羽なき箭なり。投石は羽なき箭の如し。因て水滸伝の作者則かの綽號とせし意なり。今の紀内生も亦その類なれど。そはあらずやなむ。さらば只その一人をも防ぎがたかる敵なるに。左右に敵を受んとは心許なき技なれども。推辞なば後までに似て勇士の恥る所なり。左にも右にも仕らんと云早に。応に実検使等は亦復假廄に參かへり来て。随即主の政元に親兵衛が答箇様々々と具に聞えしかば然らば准備を急げとて。政元則鬼平五が願ひを許して立されば。鬼平五欣然と言葉して走り

第三戦
親兵衛
直道景
紀を懲す

出て香車介の身邊に赴て。怱々と告く身装を整へり。姑且して第三戰の蒐大鼓。又鼕々と响くを暗號に東門より犬江親兵衞ハ馬上雄々しく装ひ。尖さる槍を腋挾み。徐々と入り來る程に。赤西の小門より香車介も馬を找る。一樣の身装馬さへ都て黒かりけり。徒而雙方馬をよせて名告りけ。槍を拈く。一上一下と廝挑む。迭の修煉に秘術を盡せバ勝負孰と見る程に既にして直道ハ堪ずや下槍になりしより親兵衞が槍の杪に附たる囊の白粉ゆく突る每に衣裳に塗まみれて隱もあらざれバ。初黒かりし戰袍衣の襟さへ胸盾さへ白點駁斑になりにけり。浩処に紀内鬼平五景紀ハ身甲衣裳精悍なく馬に拍れ西門より甘奪地に走らし來つ。衞と馳抜て親兵衞の後方を距る程十間許馬の鼻昇つら無旋らして。礫を飛して親兵衞を打隊さんと構へたり畢竟景紀投石をもて親兵衞を打隊するや否や。并ハ又下の回に解分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之二十五終